



日本経済の父「渋沢栄一」 第三回

講談師 一龍斎貞花



五百以上の会社の設立に携わり、戦後渋沢家はGHQの財閥指定を受けたが、調べたところ、渋沢家は裕福であったが、財閥と呼べるほどの資産を持っていなかった。財閥指定の解除をGHQから申し出たほどで、社会公共事業に私財を寄付した人です。

「実業家は社会事業に貢献しなければいけない」

「会社の用は我が物と思え、会社の金は人の物と思え」

と言っています。

「会社の金は、我が物と思う」と、いう方はいらっしゃらないでしょうね。

慶応三年一月十一日、徳川昭武はナポレオン三世が開催する、世界大博覧会に徳川十五代将軍の名代として招待され総勢二十九名。いずれもチョンマ

ゲに大小という出で立ち。

フランス船アルヘイ号は、汽笛をひびかせ横浜を出航。

時に栄一二十八歳、これが大実業家への第一歩となったのでございます。

庶務会計係の栄一は、きちんと日記をしたため船中の様子を、

「船中の取り扱いきわめて鄭重なり。毎朝七時頃ターブルにて茶を飲ましむ。茶の中へ白砂糖を入れパン菓子を出す。ブル バターのフランス語

で牛の乳のかたまりをパンにぬりて食せり、味ははなはだ美なり。食後カツフェー（コーヒーのフランス語）、豆を

煎じたるを湯で出だし砂糖、牛乳を和してこれを飲む。すこぶる胸中を爽やかにす」

生れて初めて洋食を食べ洋風の生活。一行の多くは、「こんなにかいコー

ヒー、変な味のバター」と毛嫌いする中に、「バターは美味なり」、「コーヒーは胸中を爽やかにする」とほめています。

この調子で、西洋の文化、社会組織をどんどん学んでいきます。

しかし昭武の近習七人は頑固で、ボーイが昭武にコーヒーを持つてくると、「若殿様に直接給仕をしてはならん、我々がお取り次ぎを致す」とボーイを追い返してしまう。

十四歳の昭武は、近習を頼りにしているのになにかあると、取りなし役が栄一に廻ってくる。

庶務、会計だが、一行の荷物や宿の世話、フランス側との事務連絡、金の出し入れ、毎日の日記もこと細かに克明に書く。

一番忙しい身体ながら、それでいて

精力的に見物し勉強して廻ります。

フランスの株式組織に刺激を受ける

パリに一年ほど滞在し、そしてヨーロッパ諸国も廻ります。

どこの国でも国賓待遇で、あらゆる文化施設や、軍備まで見せてくれる。

パリでナポレオン三世に謁見の時、金色さんぜんたる六頭立ての馬車で、チュイルリー宮殿へ。三世や王妃と言葉を交わし、昭武は衣冠束帯の正装。

補導役は銀行家ヘラルド、武術の指南役が陸軍大佐ヴィレット。

ヘラルドの指導で見学したフランスの株式組織、パリにはたくさんの銀行や会社があつて、大衆の金を集めて大規模な営利事業を営み、その利益が大

規模な営利事業を営み、その利益が大

規模な営利事業を営み、その利益が大

規模な営利事業を営み、その利益が大

規模な営利事業を営み、その利益が大

規模な営利事業を営み、その利益が大

規模な営利事業を営み、その利益が大

規模な営利事業を営み、その利益が大

規模な営利事業を営み、その利益が大

衆を富ませ、ひいては国を富ませていることに大きな刺激を受けたのでした。

これが後年、日本へ帰ってから「合本法」と称して着手した株式組織でした。

台湾の李登輝さんは、2012年「日台の心と心の絆」という著書の中で、「日本は莫大な個人金融資産を抱える国です。この金融資産が投資資金として、市場にきちんと流れる道筋を造ることが重要です」と。

個人資産が活かされていない。多額の国債発行による赤字国家といわれるものの、個人資産が多いから心配ないとも言われるところです。

資金留保の多い会社も同様のことがいえるのではないでしょう。

銀行家は町人、大佐はお武家様、ところがその武士が町人に、一目も二目も置いているのを見て、

「フランスでは肩書でなく、知恵や能力が尊敬されているのだ」

差別のない実力主義。

人間は平等でなければいけないんだと強く認識し、後年実業家となり、政府の大臣にも堂々と立ち向かったので

す。

ベルギーへ行った時、昭武が製鉄所を見学したと聞いた国王が、

「それはよい所を見学なさいました。

鉄を多く産出する国は必ず富み、鉄を多く使う国は必ず強い。日本も強くなるためには、これからどんどん鉄を使うなければなりません。その節は是非私の国の鉄を買って下さい」

「二国の国王が、こんな商売人のような売り込みをする。それが国を富ませるのだ。武士は食わねど高楊枝とはい違い。国を栄えさせるには、將軍が営業をしなければいけないのだ」

上杉鷹山は、「私も儲けたい」と自ら桑の苗を植えましたし、外国の国王、大統領が日本へ国賓で来て、天皇や総理大臣と会いますが、儀礼的なケースがあり、商社を訪問することが少なくありません。訪問先の商社にはその国の国旗が掲げられています。

日本も、新幹線や原発その他売込みを行っています。外国の方がずっと上手で、安倍前総理は世界中飛び廻り外交の首相といいましたが、外遊で金を使いすぎたという批判も少なくあり

ませんでした。成果があればそうした批判は起らないはず。アメリカから言われるままに武器や戦闘機を購入していませんか。

俺たちは武士だという態度で、食事、風習に合わせようとしないう者が多い中に、栄一は、

「西洋の文明開化は聞いていたよりずっと素晴らしく国を富ませている。

もつともっと多くを学ばなければいけない。長い間鎖国をしていて正に井の中の蛙。金融は自由自在、一国内だけでなく世界全体で動いている。機械、動力の素晴らしさ、火はガスといつて形なくして燃え、夜は昼間より明るく、町のところどころに噴水があり、道路のほこりをしずめ、家は石造りで七階八階、部屋も美しく重臣の住まい以上。婦人の美しいこと玉の如く、楊貴妃や西施にも劣らぬ美人揃い、何もかも嘆息することばかり」

と、故郷へ書き送り、皆チヨンマゲ姿のままだったのを、いち早くさん切り頭にし、その写真を見た奥さんは、

「なんて恥ずかしい姿」と、嘆いたといひます。

こんな栄一を目の仇にして悪口を言う先輩がいた。

「幕府を倒すと息巻いた男が、一橋の家来から幕府の家来になり、偉そうな口をきいても命は惜しいものとみえる。攘夷を唱えたものが夷狄の国へ行き、その国の有様を有難がっている。どこまでシャーシャーした男だろう」

この悪口に、家族は身を切られるような思いをしたといいます。

しかし栄一は、

「子どもの時から、あの男に後指をさされてなるものかと自分を励ましてきた。だから後になつて考えてみると、いつも私に親切だった人より、この意地の悪い先輩の方が私を磨いてくれた恩人ということになる」

と、ご子息の秀雄さんに語ったといひます。悪口を言う者を恩人だと言われるんです。大人物の考え方はすごいですね。

栄一翁の爪のあかでも煎じて飲んでいたら、少しはましな人間になったんじゃないかと、この話をこさえながら痛感しました。

フランスでの一通りの行事が終わって一行は、スイス、オランダ、ベルギーを廻っていると、「大政奉還」という日本の政変。帰国した栄一が実業家への道へと踏み出すお話しは次回のお楽しみ。